

# 反日の再生産

日本が戦前期の三十五年間にわたり統治してきた国が韓国である。韓国との国交正常化は、一九六五年に発効した「日韓基本条約」以来のことである。

それから数えて五十数年、第二次大戦で日本が敗北、韓国統治の終了を余儀なくされてからは七十数年が経つ。仮りに日本の統治が韓国にとっていかに意趣遺恨に満ちたものであったにしても、これだけの時を経過すれば過去はもう「歴史」となっていくのが通例であろう。七十年以上も前のことであれば、その時代を生きた人間自身がだんだん少なくなり、やがては姿を消していく。

しかし、日韓関係は時間が経過すればするほど、過去が次々と新たな装いを整えて出来し、歴史が古くなることはない。併合条約の問題も労働力動員の問題も、これらはすべて日本統治時代の問題である。日韓間の複雑な歴史的・文化的な関係を反映して交渉は難渋をきわめたものの、両国政府は知恵の限りを絞って一九六五年の合意にたどり着いた。この合意により過去は歴史となったはずである。

わたなべ としお  
渡辺利夫 (公益財団法人オイスカ会長)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学、東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任(二〇一〇年十一月、退任)。二〇一七年六月より現職。

しかし、いまの韓国では日本統治時代などまるで知らない子供や若者までが反日的センチメントに身を焼かれている。学校教育が過去の記憶を次々と掘り起こし、これに反日色をたっぷり練り込んで子供達に教えているからである。反日はすでに韓国の「国是」となってしまったかの感がある。

反日的な歴史を扇動するものが韓国の左派政党であり教育者やジャーナリストである。そこまではわからないではないが、困ったことに過去の問題を「歴史認識問題」として捏造し韓国や国連などに火をつけて回ってきたのが日本の弁護士やジャーナリストだという事実である。彼らは韓国では「良心的日本人」として敬愛の対象となっているらしい。西岡力氏の『日韓「歴史認識問題」の40年』(草思社)にそのことが詳述されている。

日本政府は佐渡金山をユネスコの世界遺産に登録申請することにしたのだが、朝鮮人強制労働の現場をなぜ登録しようとするのかという反日世論が彼国ではやくも沸き立っている。